

# 平成27年度沖縄群島病害虫発生予報第1号(4月予報)

## I 4月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	20	40
平 年 並	30	40	40
低い(少ない)	30	40	20

(平成27年3月12日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	21.4	24.1	19.0	165.7	123.8

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

## II 4月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 さとうきび

(1) カンシャコバナネナガカメムシ(ガイダー)

発生の程度 : 並

予報の根拠

- a 3月中旬の調査の結果、茎当たり虫数は0.5頭(前年0.05頭、平年0.8頭)と平年並であった。
- b 2～3月の気温に基づく、3月19日時点での防除適期は、沖縄本島および周辺諸島で平年より1日遅く、南・北大東島で平年より3日遅いと予想される。

防除適期予想日(3月19日現在)

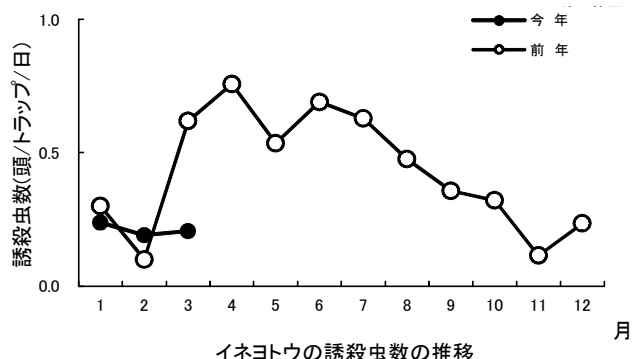
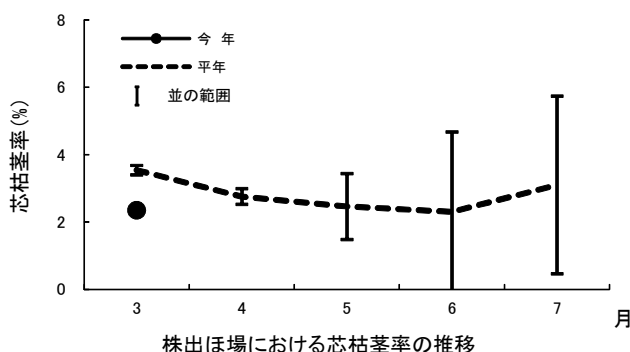
地 域 別	防 除 適 期	2.5齢期予想日		
		本 年	平 年	平 年 差
沖縄本島及び周辺諸島	4月17日～4月31日	4月24日	4月23日	1日遅い
南・北大東島	4月15日～4月29日	4月22日	4月19日	3日遅い

<防除上注意すべき事項>

- c この時期に茎当たり虫数が20頭を超える場合は防除をすることが望ましい。
- d 薬剤防除の際は、周辺住宅地や隣接ほ場に薬剤が飛散しないよう風向きに注意する。

○ イネヨトウの防除対策

- a 3月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は2.3%（前年1.4%、平年3.5%）と平年よりもやや少なかった。
- b 1月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.2頭（前年0.6頭）であった。



<防除上注意すべき事項>

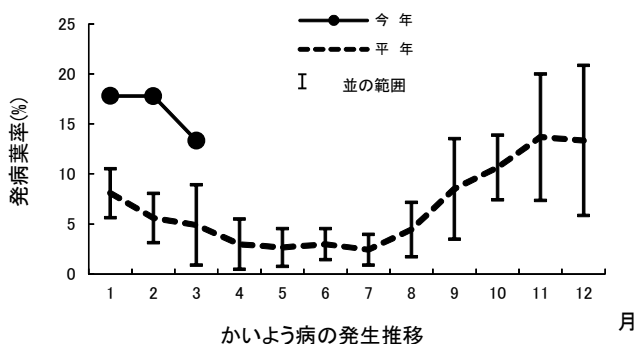
- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

## 2 タンカン

(1) かいよう病

発生程度 : やや多  
予報の根拠

3月中旬の調査の結果、発病葉率は13.3%（前年0%、平年4.9%）と平年よりもやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 春芽への感染を防ぐために、薬剤による防除を徹底する。
- c ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

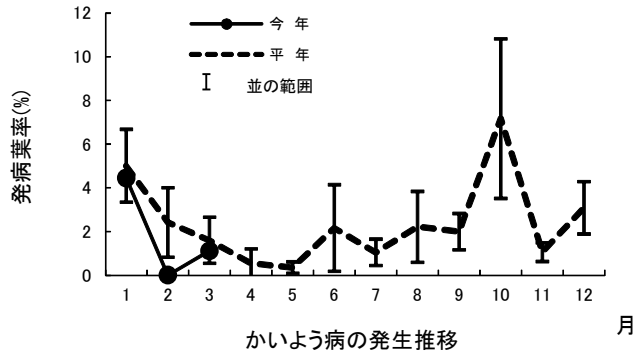
### 3 温州みかん

(1) かいよう病

発生程度 : 並

予報の根拠

3月中旬の調査の結果、発病葉率は1.1%(前年0%、平年1.6%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 春芽への感染を防ぐために、薬剤による防除を徹底する。
- c ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

### 4 マンゴー

○ チャノキイロアザミウマの防除対策

- a 3月中旬の調査の結果、一部施設で発生していた。
- b 開花期以降は本種が増加する可能性があるので、早期防除に努める。
- c 混合花の新葉や不用な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- d 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- e 薬剤防除を行う際は、受粉昆虫に影響のないよう巣箱等を施設外に移動する。
- f 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

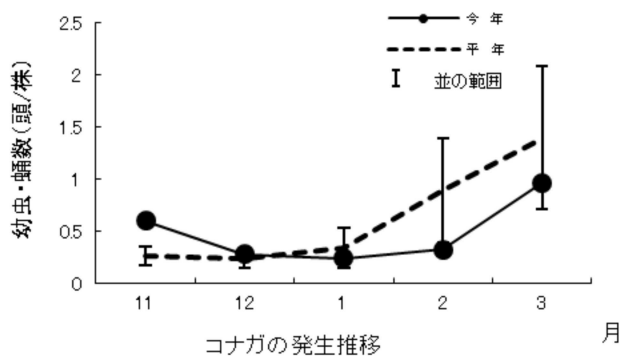
### 5 キャベツ

(1) コナガ

発生程度 : 並

予報の根拠

3月中旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は1.0頭(前年0.2頭、平年1.4頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ほ場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残さ処理を徹底し、ほ場管理に努める。
- b 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。

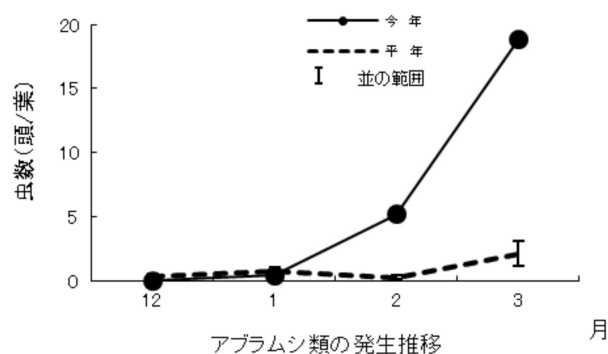
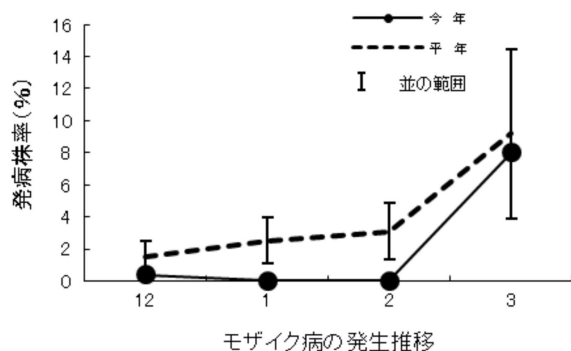
## 6 かぼちゃ

### (1) モザイク病

発生程度 : やや多

予報の根拠

- 3月中旬の調査の結果、発病株率は8.0%(前年0.4%、平年9.2%)と平年並であった。
- 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は18.8頭(前年0頭、平年2.1頭)と多発生であった。また、有翅虫が多く観察された。



<防除上注意すべき事項>

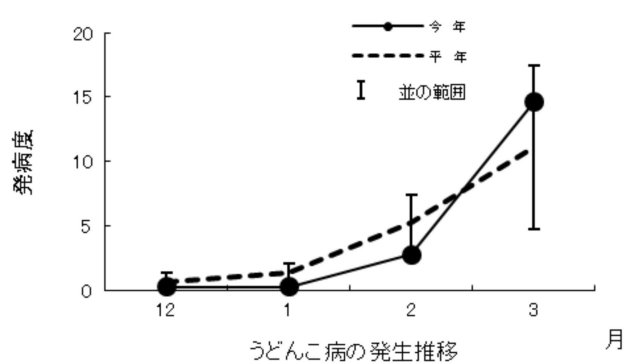
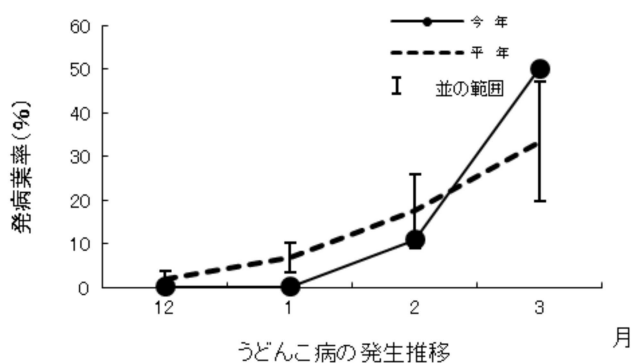
- ほ場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除去する。
- 発病株は発生源となるので、みつけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- 収穫後の残さは発生源となるので速やかに片づける。

### (2) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

3月中旬の調査の結果、うどんこ病の発病葉率は50.2%(前年0%、平年33.4%)とやや高く、発病度は14.6(前年0、平年11.1)と平年並であった。

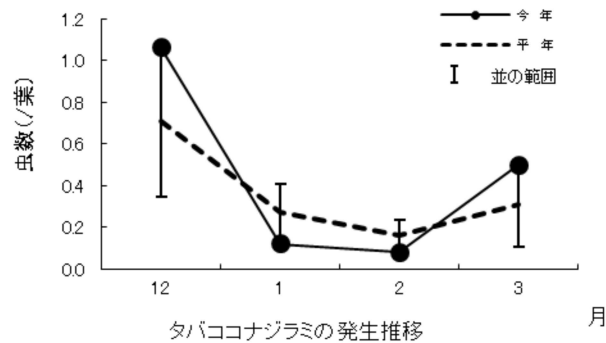


<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので、防除を徹底する。
- 平成26年度病害虫発生予察情報第10号1月コラム(平成26年12月27日付)参照。

(3) タバココナジラミ  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

3月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.5頭(前年0.1頭、平年0.3頭)と平年並であった。

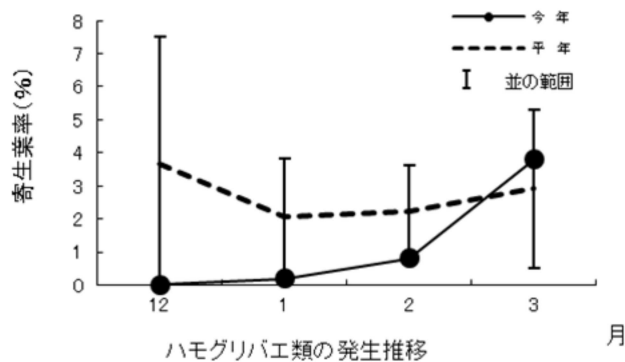


<防除上注意すべき事項>

- a 多発すると白化症を引き起こし、生育不良となる場合がある。また、防除が困難になるので、葉裏を観察し早期防除に努める。
- b 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(4) ハモグリバエ類  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

3月中旬の調査の結果、寄生葉率は3.8%(前年0%、平年2.9%)と平年並であった。



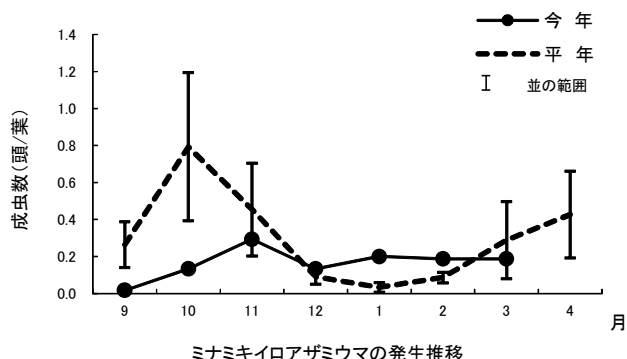
<防除上注意すべき事項>

- a ほ場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- b 幼虫期間が比較的に短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- c 農薬の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。

## 7 きゅうり(施設)

- (1) ミナミキイロアザミウマ  
発生程度：並  
予報の根拠

3月中旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.18頭(前年0頭、平年0.29頭未満)と平年並であった。



### <防除上注意すべき事項>

- 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除去する。
- 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- 摘心や摘葉後の残さは、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

### ○ べと病の防除対策

- 3月中旬の調査結果、発病葉率は16.4%(前年0%、平年3.7%)と平年より高かったが、発生は一部地域に限られた。
- 密植や過繁茂を避け、透光・通風をよくする。
- 被害葉は施設内から持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。

## 8 ピーマン

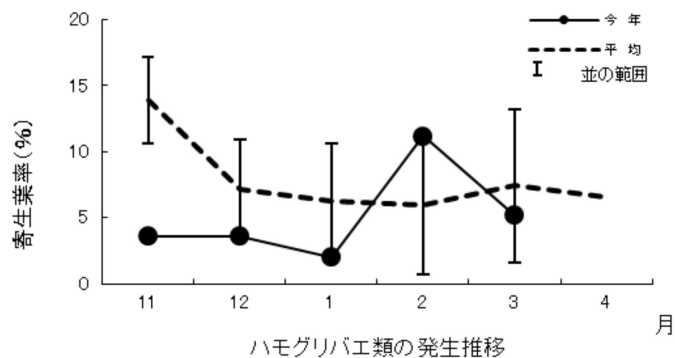
### ○ うどんこ病の防除対策

- 3月中旬の調査の結果、発病葉率は0.8%(前年0%、平年1.1%)と平年並であったが、発生は一部施設に限られた。
- 通風が悪いときに発生しやすいので、老葉や病葉を除去し、透光通風を良くする。
- 今後、発生が増加すると考えられるので防除を徹底する。
- 多発すると防除が困難となるので、葉をよく観察し早期防除に努める。

## 9 さやいんげん(平張)

- (1) ハモグリバエ類  
発生程度 : 並  
予報の根拠

3月中旬の調査の結果、寄生葉率は5.2%(前年2.2%、平年7.4%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 摘葉等による残さは成虫の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして、ほ場外に持ち出し処分する。
- 本種は薬剤抵抗性が発達し、また野外に多数の在来天敵が存在することから、天敵に影響の少ない選択性殺虫剤を使用する。

### ○ ミナミキイロアザミウマの防除対策

- 3月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.22頭(前年0.02頭、平年0.27頭)と平年並であったが、一部ほ場で多発した。
- 発生源となるほ場内外の雑草を除去する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。